

スポーツにおけるアマチュアリズムの推移と展望

富 田 善 太 郎

It is needless to say that popularization of sports should have its object the promotion of the well-fare of people in general. And amateurism seem to me to be a key to the solution of this important question. Modern commercialism and nationalism in sports are threatening amateurism by presenting very subtle and complicated problems.

Historically, amateurism is a very old conception with a long tradition. It originated in ancient Greece and Rome, but it was in England in the latter half of the 16th century that amateurism came to dominate sports. Naturally this amateurism developed in England was characterized by many qualities of the English feudalistic society at that time. So the history of amateurism in England may be said to have been a history of modification or elimination of its feudalistic elements.

The *raison d'être* of amateurism in sports is based on three major facts:

- (1) the essential nature of sports, (2) the principle of equality in sports,
- (3) protection of young people from evils of sports. But these basic facts of amateurism should be re-examined from the standpoint of progressing popularization of sports.

Powerful effects sports enjoy in commercial advertisement and emerging professional sports are affecting amateurism adversely to a degree. So it is a big challenge to popularize sports without losing the ideal of amateurism overcoming the adverse effects of commercialism.

Moreover the spectacular development of sports in communist countries sponsored by "state amateurism" in which "amateur" sportsmen are supported by governments, has presented further difficult problems to amateurism.

How can the contradictory concepts of amateur sports in the East and West with their different social systems be brought into harmony?

This is one of the most important questions which we should try to solve with insight and clever handling.

目 次

緒 言

- 〔Ⅰ〕アマチュアリズムの推移
- 〔Ⅱ〕アマチュアリズムの根拠
- 〔Ⅲ〕アマチュアリズムと経済問題
- 〔Ⅳ〕国家アマチュアリズムの問題

む す び

緒 言

スポーツは吾々の生活にいいよ深いつながりを持つようになって来ている。スポーツが大衆化し、生活化すればするほど、それが人間の生活に貢献するか否かは重要な問題であると言えよう。アマチュアリズムはそのスポーツのあり方に対する伝統を持った一つの観念である。しかし現在、商業主義の進攻、ナショナリズムの激化はアマチュアリズムに対して、複雑で困難な多くの問題を提示し、これ等の解決に苦悩

しているという表現も誇張ではないであろう。筆者はその成立の推移を明らかにし、問題点を考察し、将来への立脚点を確かめたいと思う。

〔Ⅰ〕アマチュアリズムの推移

近代オリンピックの創始者クーベルタンはアマチュアリズムの生命の長さをたたえて「アマチュアリズムは驚嘆すべきミイラである」と言った。それは社会生活を反映しつつ、伝統を持って成長して来た一つの基本観念であるから、その歴史的推移を明かにしなければ現代の問題を把握することはできない。ここに成立と推移についての概観的時代区分を試みたい。

(1) ギリシャ・ローマ時代

近代オリンピックが理想としているスポーツ精神の横溢していたのは、オリンピックの黄金時代と言われる紀元BC468年から同 400 年頃までであった。優勝者には月桂冠とオリーブの枝が与えられ、その胸像がアルチスの森に建てられた。肉体の栄光を讃えると共にその人格に価値を求める、その高雅な精神も次第に墮落して行った。

後には税金や兵役を免除されるようになり、そのため極端にはペロポネソス戦役やマラソンの役に出征したのは青白い、やせた青年だけだったとさえ言われた。アテネでは自国の優勝者に多くの賞金を与え、スパルタでは王について軍人と同じ資格を持つようになった。こうした風潮はオリンピック競技の選手を墮落させ、又職業選手を作る悪い結果をもたらした。コステニアヌス法典には、全生活を競技におく、少くとも 3 回、そのうち 1 回はローマ或はギリシャの祭典競技に優勝した者には、市民の義務を免除するというディオクレティアヌス帝の宣誓を載せている。

このように特権を与えることは、相手の国の選手を金で買ったり、賞金目あてに各地の競技会に出場するというようなオリンピック

精神と全くかけ離れた悪い習慣を生ずることになった。スポーツの職業化した状態を最も酷評したのは悲劇作家のエウリピデスであったが、現在でもプロ・スポーツの或る種のものと思わせて興味深いものがある。

「ヘラスにおける無数の悪のうちで競技者のレースは最悪である。彼等は駄弁の奴隷であり、胃袋の崇拜者である。若いうちは市民の賞讃を得て華々しく歩き廻っているが、一度傷ましい老齢が訪れるや、着古した上衣のように路傍に投げすてられる。私はこれらの人を見に集って来てつまらぬ喜びをはめるギリシャ人の習慣を責める。誰がかってこのように種々の競技で祖国をたすけたことがあったであろうか。」

ユベナリウスの有名な「健全な身体に健全な精神の宿ることが望ましい」という言葉もローマ時代の専門競技者に対する批評と見ることができる。

以上のようにスポーツのあり方、スポーツマン或は職業競技者に対する批評という形で一種のアマチュアリズムが主張されたのはギリシャ・ローマ時代であった。現在のアマチュアリズムはこの精神を継承しながら、又別の要因を加えて発生してきたが、それには相当の時日を必要とした。

(2) イギリスにおけるアマチュアリズムの底流

1512年はじめて競馬に賞品が出されてから、イギリスでは軍用馬改良という名目で競馬がさかんになり、1551年ジョッキー・クラブが組織されると、これをプロフェッショナルとよんでレジスタンスを試みる紳士が現れてきた。しょせんは職業騎手に太刀打ち出来なかった我慢に箔をつけるためであったろう。

この消極的榮譽者たちとちがって、実力で堂々と専門家を撃破したのがボクシング界の王者と言われた学生ジャックソンで、1795年である。アマチュアという言葉が発見されていなかったのがジェントルマンと呼ばれた。彼は専門家に勝ったが賞金を受取ることを潔

しとしなかった。

そこで専門家のシャットアウトが学生の間で謀議されていた。第一にスポーツで生計を立てている者に対する卑下、日頃コーチを受けている者と技を競っては当然勝負見込みがないという卑屈、これらはイギリス紳士の体面に関する問題であった。このイギリス社会の底流がアマチュアリズムを生み出すこととなった。

(3) 古典的アマチュアリズムの成立

はっきりした形でアマチュアリズムの問題が出て来たのは、貴族や富裕階級の人々が多く参加していたボートにおいてであった。

(註1)

この当時の様子を Savag, H.J. は次のように述べている。

「高等学校や大学で競技会が最初に発達したのはボートで、早くも1823年に Oxford 大学のインター・カレッジ 競漕会で、アマチュア選手にプロフェッショナルが援助したことで争論が生じた。この年 Christ Church (オックスフォードの中の一つのカレッジ) は、ボート造船家の Stephen Hennis が Brasenose (同前) のために漕ぎ、またウオーターマン(職業的漕手)の Issac Kingが Jesus (同前) に加わり漕いだので競漕出場を拒絶した。Christ Church の寮生達は Brasenose のボートと共に土手を走って “No Hired Waterman” と呼んだのだが、……1831年にはレアンダーとオックスフォードの競漕に200ポンドの金が賭けられた。……」

学校スポーツとは別に、民間団体たるレアンダー・クラブ (Leander Club) は1818年頃設立されたといわれている。この頃から競漕会が盛んになりはじめた。参加者にはいずれも貴族や富裕者が多かった。その競漕会にプロフェッショナルが雇われて出場していたが、1840年頃からこの事実に対する主張が起った。それは ①職業家でなくゼントルマンであること ②接触の禁止 ③賞金でなく勝利そのものを目的とすることなどであった。即ち初期のボートレースに見受けられる主な点は、競漕会がレクリエーションの域をこえて

勝敗を争う真剣な様相を帯びていたこと、賞金や賭金があったこと、ボートに関する職業家があらわれ、レースをコーチしたり出場したりしたこと等である。

これ等の傾向に対し、1878年、バットニーにおける漕艇等の有力者の会合で、アマチュアの定義を次のように定めた。

「アマチュア漕手或はスカラーは陸海軍士官、文官、高等の職業に従事する者、大学若しくは高等学校の学生生徒、其の他労働者又は職業競技者を含まない既設の競艇クラブ員に限る。賭金、金銭、入場料を自当とする競漕に参加した者、生計の手段として種別の如何を問わず競技に従事し或は指導し援助した者、ボートの内外の仕事に雇われた者及び職工、労働者を除く。」

さらに1879年、ヘンレーレガッタに参加する者に対し、主催者は次のような規定をアマチュア定義として発表した。

「次の各項の該当者はアマチュア漕手、スカラー、舵手と考えることを得ない。

1. 賞金、賭金、入場料のためにオープン競技に参加した者。
2. 賞金のために職業選手と共に又は対抗してレースに参加した者。
3. 生計の手段として何等かの競技を教え、或は援助、指導した者。
4. 報酬又は賞金を得る目的をもってボートに関する仕事に雇われた者。
5. 職業として或は賞金を貰う雇員として、機械工、職人、労働者であり、あった者。

これら古典的アマチュア規程の特色は次の3点にあったと言えるが、それは現在と深いつながりを持っている。

1. ボートを職業家の手に安易に任かすよりは、ボートを愛好し、それに没頭する人々の心からの努力によって完成さすべきであるとして、プロを除外しようとする考え方。
2. 賞金や賭金に伴うレースの混乱や墮落を防ぐために、スポーツと金銭との関係を断絶しようとする考え方。これは社会情勢の変化に伴って変化進展して現在に引き継が

れてアマ規程の主要な部分をなしている。

3. 初期資本主義の中で、封建的階級制度の名残と中世騎士道の流れを汲み、アングロサクソンの気質を受けて成立したものであり、貴族趣味的性格を帯びていた。アマチュアという観念はイギリスの階級的所産であるという批判はこの辺から生ずるであろう。スポーツの大衆への普及によって此の色彩は概ね払拭されたが、観念と実際において全然その痕跡をとどめていないとは言えないであろう。オリンピックの馬術競技の出場資格は下士官、兵を除いて士官に限るというのはその一例である。

(4) アマ規程の論議と整備

ヘンレー・レガッタのアマチュア定義について、陸上競技は1880年、ア式蹴球は1885年、ラグビーは1886年にそれぞれアマとプロの定義を成文化した。アメリカでも1879年、National Association of Amateur Athletes of America がイギリスと殆んど同様のアマ規程を発表しているが、既に職工、労働者等を除外する条項を含んでいないのが注目される。

スポーツが次第に普及し、種目が増加し、各国で各種目の統轄団体が結成され、それ等が各国にアマチュア定義を作りはじめると共に此の問題は複雑になってきた。1894年パリで開催された最初のスポーツ国際会議（クーベルタンによるオリンピック復興会議）でもアマチュア問題は解決出来なかった程である。それはスポーツ団体毎にその伝統の異なること、国別にスポーツの事情が違ふことによって、アマチュアそのものに対する考え方を異にしているからである。

これ等の論争は1909年のIOC総会でクーベルタンをして次のように嘆きさせるに至った。「……きわめてわずかの金銭をとったという理由で、この崇高な（スポーツの精神的）感じに浴することを拒否するという事は、私から見るといささか子供らしいように

思われる。もちろんプロフェッショナルとアマチュアとの間に一線を画することは必要であろうが、これがために角を矯めて牛を殺す結果になることをおそれたのであった。」「ただ一度だけ職業選手と競技したということで、一生涯アマチュアの資格を失うということは私には理解できない。」「……要するに凡てはプロレタリア階級に対する宣戦であり、また特殊階級のひとりよがりとも見られる。」「この時から私はアマチュア問題について全く興味を失ってしまった。」

(5) 倫理綱領の時代

スポーツが金銭や教育や、政治にさえも関連して来るとアマ規約は必然的に複雑にならざるを得ない。かくしてアマ規定が整備され条項が増加すると共に、スポーツの人気の高騰に伴って、規約をくぐってプロ的行為をする者がふえてきた。条項の整備とこれをくぐり抜けようとするセミプロ的競技者との追いつけ競争となり、アマチュアの主要点は条文を整備することではなく、心の問題、態度の問題が基本であるとして、その精神の高揚を主張した時代があった。

アメリカの National College Athletic Association が1921年に、アマチュアリズムの精神を次のように解釈する旨の発表をしたのはその一例である。

「アマチュアリズムの精神はアマチュア定義に含まれているすべてと、さらにそれ以上のものを含む。すなわち其の精神は名誉・正直、フェアプレー・誠実等の高尚な意識を根底としている。それはつまらぬ技術を弄することなく、又競技規則を回避したり、相手に不公正な行為をするようなことを排斥することである」

(6) 現在のアマチュア規程

1925年に I.O.C. と各国際競技連盟代表者の会合で、オリンピックに参加する競技者の資格を次のように定めた。

1. いかなるスポーツであってもプロフェッショナルはいけなない。

2. 情を知ってプロフェッショナルとなった者はアマチュアに復帰することは出来ない。

3. 失った俸給のためにその補償を受取ってはいけない。

昭和32年12月4日改正の日本体育協会アマチュア規定は次の前文につづいて、17条の本規定とアマチュア旅費規定4条及びアマチュア規定付属書11条からなっている。前文は現在のオリンピックのものとはほぼ同趣旨である。

「アマチュア・スポーツは之を愛好するが故に行われる。他から強いられることなく、利用されることなく、自分自身が好むが故に行われる。従ってスポーツが他の目的のために、例えば金銭的、名声的、広告的目的のために利用されたり、見世物になったりすることはアマチュア・スポーツの本質に異背する。」

〔Ⅱ〕アマチュアリズムの根拠

アマチュアリズムは以上に述べたように、幾多の変遷を経て現在に至っているが、その間種々の疑義や反論もあった。

アマチュアリズムは貴族的イギリス社会の遺産であって、既に現代社会にはそぐわない、偏狭で排他的な観念に過ぎないのではないか。

アマチュア規定は、美しいスポーツの理想を固執する余り、競技者を不必要に拘束することによって、結果的にはスポーツの普及と発達を阻害しているのではないか。

文学や芸能に関係する者が、その制作の発表によって報酬を得たり、金銭を受領して差支えないのに、何故スポーツだけが其の活動の結果として報酬を得てはいけないのか。

メーステージ (Maestage) のジョン・レイ (John Lane) が一軍人としてラグビー・リーグ・クラブ (註=プロのラグビー) のためにアマチュアで試合をした故をもってラグビー・ユニオン (Rugby Union) からアマチュア資格を剝奪された事件に関連して、イギリスにおいてもアマチュア論議が沸騰した。P. C. マッキントッシュの次の主張を見て

も、オーソドックスなアマチュアリズムの本場イギリスにおいてさえも、此の問題には異論が多いことがわかるのである。「…ジェントルマン・アマチュア (Gentleman Amateur) という名称で認められる階級はもはや存在しないのである。それ故、ある一つのスポーツでプロを宣告された者は、他のスポーツでもアマチュアの資格を失うということを宣告するのは、1956年の現在、どのスポーツ統轄団体にとっても不合理であるばかりでなく、僭越なことにもなるのである。…」(註・2)

アマチュアリズムはスポーツの根底に存する伝統を持った一つの思想である。単に一つの言葉で簡単に言い現わしたり、機械的に定義し尽せない複雑な要素を含んでいる。筆者はアマチュアリズムの主張を分析して次の三つの要素を見出すことが出来ると考える。若し現在の社会がアマチュア精神を擁護せず、アマ規定を持たなかったとしたらスポーツは如何なる形態をとっていたであろうか。「…他国ならいざ知らず、ローマに関する限り、スポーツそれ自身は善でないことを教えている。しかしスポーツというものは、一国の市民を向上させもするし、同じ位の力で墮落させる要因にもなり得るものである。人間の強い力であるスポーツは、いつでもしっかりした統制を必要とする教育手段に外ならないのである。」(註・3) という見方は現在の社会にもそのまま当てはまるであろう。

(1) スポーツの本質観

アマチュアとはラテン語の *Amator* (愛好者) から出たものである。それはスポーツの本質につながっている。スポーツは好きだから行うものだ。したがってそれは趣味であり道楽である。趣味や道楽は余暇に行うもので、それから金を得るものではなく、むしろそれに自分の金と時間を費すものである、といった一連の考えが続いている。スポーツはスポーツ活動そのものを目的とする自己目的的活動であって、結果を目的とするものでは

ないとするのである。アマチュアリズムの根拠の一つとして此の本質観があり、スポーツの俗悪化に対する防波堤の役目をしていることを認めなければならない。

※スポーツの本質かスポーツの機能か

メルボルン・オリンピック選手派遣費の不足を補うために、日本体育協会は競輪の売上金を貰うことになったため、ラグビー協会は体協を脱退するという問題が起こった。ラグビー協会の主張は「…日本のスポーツは後進的であったために、オリンピックを中心として競技大会の開催によって、即ちスポーツの社会的機能を利用して普及発達して来たために、その本山であった体協はスポーツの本質的活動よりも、その機能に眩惑されている様に思われる。」としてスポーツの本質を重視し、「…こうしたやり方は学生スポーツマンをして、アマチュア・スポーツマンの第一義ともいふべき、自分の金でスポーツをやるといふ鉄則を忘却させ、自分は他より秀でているがために当然こうした援助を受ける事ができるという観念を植えつけてしまう…」『ラグビー協会がこうした現状認識をもとに、ラグビーだけでも愛する若きラグーマンのために良好なスポーツ環境と真のアマチュアリズムの指導のために体協を脱退するというなら体協も大いに反省すべきであろう。…』(註・4)という純粋な立場から体協の処置を深しとしなかったわけである。

スポーツが大衆化し、又いよいよ大衆化すべき現在にあっては本質か機能かという問題の提起は陳腐であり、両者を如何に調整するかが問題である。

※スポーツと勝敗

「好きなだけやる」というスポーツの素朴で純粋な立場から言えば勝敗は殆んど問題にならない。しかし高度に組織されたスポーツではこのような簡単な一つの基本観念によってのみ律することはできない。ここではスポーツは競技者それ自身の楽しみだけではな

く、背後の集団の榮譽に結びついている。そしてそれも無視することのできない人間の感情である。人間の行動は二者択一的な考え方で捉え得ないものが多いが勝敗に対する態度も同様であろう。激化するオリンピックにおけるナショナリズムは其の危機の要素であると言えられるが、それについての東氏の見解は妥当なものであると思われる。

「…現実には国境があり民族がある限りナショナリズムが生れるのは当然であって、一概に毛嫌いすることはないと思う。警戒すべく排除せねばならないのはその行きすぎであり矯激な国家主義である。そしてその過誤を犯すおそれのあるのは、競技に参加する選手それ自身よりも、むしろその背後にある諸々の力一指導者、監督、団体、世論であることを指摘したい。…オリンピックの求めるものは必ずしも世界最高の水準ではなく、むしろその個人のアマチュアとしての最大の努力の成果である。これが「参加」という言葉の意味でもあると理解するならば、アマチュアとして許容される犠牲の限界の判断に迷うことはないはずである。…」(註・5) 行き過ぎやゆがみの反省として吾々は常にスポーツの本質を忘れてはならない。

(2) スポーツにおける平等の原則

スポーツの試合は両者平等の立場を必要とする。一方は職業として専門に練習して居り、他方は仕事の余暇に練習するのみであるとするならば勝敗の帰趨は自から明らかであり平等の立場ということは出来ない。しかもプロ選手は少く、勝利が常に之等少数者の手に占められるならば、スポーツに対するアマ競技者の興味も熱意も消失して、スポーツの発展を阻害すること甚大であろう。アメリカのアヘザリントン教授が指摘しているように、アマチュアリズムは小数の特権者に対し、多数の者の自然の権利の保護することを目的としていると言えよう。

※新しい理念の希求

上述の平等の原則はそれ自身としては正当であり、成立の推移から言って自然発生的なスポーツの姿である。しかし、不適格者を排除することによって平等の原則を貫こうとする消極面が重視されて来た傾向を否定することは出来ない。今やスポーツは曾ての有閑階級の手から、学ぶ者、働く者の手に移っている。現代のスポーツをやろうとする人々の諸困難を把握し、之を健全に発展させるために、積極的に推進する様な新しい理念をアマチュアリズムに盛り込むことが希求されるのである。

(3) スポーツの弊害から青少年を守ろうとする教育的配慮

スポーツの弊害は次の三つに大別することが出来よう。①勝利を追求する激しい身体的競争から生ずる粗暴、不公正等 ②過度に熱中することから生ずる身体的不健康や学業、仕事の怠慢 ③競争に対する世人の関心が極めて高いため、商業主義の対象となり、広告宣伝に利用される機会が多く、容易に経済的利益を得ることが出来る

第①項を対象とするものはルールと審判であり、第②項は指導者や教育機関の関係するところである。主として第③項がアマチュア規定の対象となっている。

スポーツが特に教育的に配慮されねばならない理由は年令にある。近時スポーツが普及するにつれて、スポーツマンの最盛期は若くなりつつあるが、其の未熟な青少年の時期に最も華やかな名声を得、誘惑の多い環境に置かれるのである。

現在自由企業制に基づくプロ・スポーツの隆盛がアマチュア・スポーツに甚大な影響を与えている事については多言を要しない。金銭の取得という点に一線を劃して、スポーツと金銭との関係を断絶し、スポーツマンを誘惑のない環境に置こうというのがアマチュア規定のねらいである。併し近時の商業主義の進攻の中で其の理想を貫くことは仲々難しく、条文

は次第に微細に亘り、金銭関係に属する規定が大部分を占めている実情である。

〔Ⅲ〕アマチュアリズムと経済問題

アマチュアリズムはスポーツと金銭との絶対的断絶をもって出発したが、時代の変遷と共にスポーツが大衆化するに伴って、或る程度の妥協を認めるようになって来た。競技会への旅費の支給、体育教師のアマ認定、Broken Time Payment の緩和の傾向等が之である。Broken Time Payment について最も厳格な態度で臨んでいた英国サッカー協会でも、世論調査の結果を尊重して 1948 年 F. A. Council で之を認めることを決定した。(註・9)

吾が国においては、国および地方公共団体は憲法第89条、地方自治法第230条、社会教育法第13条の規定によって社会教育関係団体に対する補助金を禁止されていたため、スポーツ団体に対する直接的な助成はなされなかった。併し昭和32年5月2日の改正法が施行され、付則により同法第13条の補助金支出禁止の適用外規定が設けられたことによって、幾らかづつ直接助成がなされるようになって来た。

之等はスポーツの大衆化という時代の流れを反映するものであろう。古風なアマチュアリズムが、スポーツの本質を過重視する余り、之に伴って起こる特権的排他主義から経済との関連を考える方向は消滅されねばならない。そしてスポーツの大衆化を目指し、根拠第3の教育的配慮から経済との関連を調整するという方向に進むべきものとする。

反面、スポーツ団体や関係者にも反省の要があろう。「現在のように膨大な経費を必要とするスポーツ界では、最早アマチュアリズムを論ずることは出来ない状態である。日本体育協会のアマチュア規定を厳格に守るとすれば、殆んどの人々がアマチュア資格を失ってしまう。」(註・7)と主張する人さえあ

る。スポーツ界はもっと素朴にかえらねばならない。そして之を妨げるものは競技する選手よりも、むしろ之を取り巻く勢力、時流の側にあるということも指摘できよう。

※アマチュアリズムとプロ・スポーツ

プロ・スポーツがアマ・スポーツに与えている影響については多言を要しない。メルボルン・オリンピックに際して、出場資格として将来プロに転向しないという誓約を要することとしたり、国際庭球協会特別委員会は、アマ選手がプロに転向してアマの実力が低下したための対策として、プロとアマの中間に認可選手という制度を設けるという全く劃期的な案を勧告する等はそのいちじるしいあらわれである。(註・8)

自由主義経済機構の社会にあっては、プロ・スポーツは企業として、ビジネスとして存在の資格を持ち、又健全なプロ・スポーツは社会に明るい娯楽を与えるという機能をもっている。唯「……すなわち職業選手の成果が民族の能力尺度とはならなかったのである。反対にスポーツの商業化が一般の能力標準を低下させた。何となれば、興味が数人の精鋭に吸収されて、スポーツをやるべき人々が常に観覧席に坐るということが確認されたからである。……」(註・9)という弊害に陥り易いという一面に対する国民の認識と自覚が強く要請されるのである。極端な例に接するとゲームを楽しむという真のアマチュアが、商業主義と国家主義の影響によって消滅するのではないかという恐怖を持つ者がある。しかし筆者はそうした極端な悲観論にくみすることは出来ない。真のアマ・スポーツを楽しむとする人々は、よい環境と指導があれば無数にあるといえよう。之等の人々の困難点を除去して、スポーツを大衆化し、生活化することが商業主義に対抗する方策であると言える。

〔Ⅳ〕国家アマチュアリズムの問題

(1) ソ連の体育・スポーツの発展(註・10)

最近におけるソ連スポーツの躍進は、世界注目の的であるが、革命以後の発展の段階は大要次の様に時期を割ることが出来よう。

第1期……赤色スポーツ・インテルンの時代

資本主義に対して、政治、経済、社会、軍事の各分野に亘り鎖国主義をとった時代で、スポーツの面でも、オリンピックを排撃し、スポーツのインターナショナルを組織し、プロレタリア・スポーツの確立を図った。記録や勝敗よりも、スポーツを通じての世界プロレタリアートの団結が主要目的であった。

第2期……国内スポーツ体制の整備時代

スポーツを国家的に統制するために、1923年6月体育評議会を政府に新設し、「社会主義労働力の培養」と「ソ連の防衛力の強化」を目的としてスポーツを奨励した。

第3期……第2次5ヶ年計画推進時代

第2次5ヶ年計画を推進するために、積極的にスポーツの大衆化を図った時代。選手養成よりもスポーツの大衆化がはっきりした目標であったが、選手制を否認するという態度はとらなかった。

第4期……第2次大戦の空白時代

第5期……戦後の再建発展時代

1948年党中央委員会は次の様な指令を出したが、ソ連の国際スポーツ界における目ざましい躍進はこの全く新しい指導方針を知らずしては理解することが出来ない。

- ①全ソの大衆的体育スポーツを発展させ、スポーツの技倆の向上を図れ。
- ②これを土台として、スポーツの主要な種目で世界最高位を獲得し、世界記録を作れ。

(2) 東西における体育理念の相異

現在ドイツは西欧的スポーツ理念と東欧的スポーツ理念の切線上にあって、世界の注目を浴びている。双方の権威者による、(註・11)体育の目的と課題についての定義を比較して其の相異を明らかにしたい。

※西、「身体訓練は最も広い意味で人間の

本能からおこるものである。その本能は限定されたあらゆる目的から解放されて、自由に運動し、純粋な遊戯の世界に止まろうとするものである。すなわちそれは、活力ある生活の発展であり、生活そのものから起こる要求の充足である。本来の意味での身体訓練は、このような遊戯的な運動の過程をひとつの方向に導きこうとするものである。……体育は単に肉体の素質を發育させたり、発展させたりすることだけに限られるものではない。でなくて教育の全体に役立ち、青少年を身体的なものの側から教育するために、遊戯、スポーツ、徒手体操や器械運動を追求するものである。……

遊戯集団やスポーツ集団の中では、人間が共同生活を営む上で普遍的な価値があり、欠くことのできない態度が重んぜられる。……すなわち体育は、本来人間に備わっている身体的、精神的ないろいろの力を調和的に發育させ、個人全体の発展と形成に共働している。特に体育は社会的特性を呼び起こし、青少年を遊戯集団やスポーツ集団を越えて、労働集団や生活集団の中に導くのである。……」

(H.・ワグナー H. Wagner)

「……社会主義を建設し、社会的、経済的、政治的成功を防衛するために人々を多面的に教育し、健康で力と意志のある人間をつくるのが民主的学校、ピオネールや青少年団体、ならびに民主的スポーツ運動の目的である。」(W.・シューレーダー = W. Schröder)

「スポーツは個人の楽しみではなくて、社会的愛国的教育活動である。この活動を認めない者は、体育とスポーツの政治的意味を過少評価する者である。」(M.・エワルド = M. Ewald)

「……したがって問題は、体操課業における平和主義の克服であり、体操課業を青少年の軍事予備訓練に役立てることである。…」

(F.・ランゲ = F. Lange)

「……われわれの民主的スポーツ運動の力は、すべて一様に意識して実行された同志的活動から生れている。したがってわれわれの同志であるスポーツマンもまた、良き思想的支柱で支えてやらなくてはならない。そしてそれによって、いわゆる単なるスポーツマン気質の危険な傾向に打ち勝ち、進歩的で戦闘的な民族スポーツの内容を明かに知らなくてはならない。」(H.・ヒュブナー = H. Hübner)

(3) 東西の共存

以上で明かなように、全く異った理念の下にある東西のスポーツは、「……人種、宗教、または政治上の理由によって、ある国家または個人に対し差別待遇をなすことは許されない」(註・12)という原則によって国際スポーツ界に共存することとなった。之は在来の西欧的アマチュアリズムと全く次元を異にするものと言える存在で、アマチュア問題に一層の複雑さと困難さを加えることとなった。

共産圏国家には所謂西欧的なプロは存在を許されないが、国家によって管理され、従って膨大な国家予算を支出し、生活を保証されて養成された選手は果してアマチュアであるか。こうして養成されたソ連の選手には、西欧的アマの原則に従って練習していたのでは到底太刀打ちが出来ないという悩みを生じた。I. O. C 会長ブランデー氏は入ソして調査したが、現在の規約の下でソ連選手をアマでないとして除外するだけの根拠を見出し得なかった。(§スポーツの英雄に対する Master of Sport の称号や其他の褒賞は廃止して西欧並みにするという条件で I. O. C. 加盟を認められたが現在も続けているらしい。)

施設や費用に制限のある場合、スポーツの大衆化と選手制度とは或る程度矛盾するのが通念であったが、ソ連はソ連流に之の問題を解決している。中共はソ連の第1期第2期を経験せずして、現在は第3期或は既に第5期に相

当する方針をとっている様に思われるが、(註・13)之等共產圏諸国家におけるスポーツの目ざましい発展の影響は無視することはできない。自由主義諸国は独自の方法で此の問題の解決を図らねばならない。身体的側面のみから見ても、青少年の体力についての資料が出つつある。(註・14)

むすび

アマチュアリズの問題は、捕捉し難く、むしろ晦渋の度を増すのみであるとも言われる。筆者は、その推移を明らかにし、問題点についての展望を試み、此の問題を考える脈絡を確かめようとした。此の問題は何時の時代においても明快な帰結は得られないというのは当然かもしれない。それは社会の良識・理想の表現であり又あらねばならず、其の社会は同質とは限らず而も、一時も停止せず進展しているからである。恐らく今後も問題は絶えないであろうが、スポーツを大衆化し、人間の生活に役立てるという確固とした観点に立ち、明るい希望をもって対処しなければならないと思う。

註

1. 主として長谷川宗憲「ボート」大正15年版に依る。
2. イギリス・スポーツ界のアマチュアリズムとプロフェッショナリズム—P・C・マッキントッシュ—体育とスポーツ第1巻第1号—P.3
3. 体育の世界史 D・B・ヴァン・ダーレン
E・Dミッチェル

B・L ベネット

加藤橋夫訳 P.545

4. アマチュアリズムについて—体育協とラグビー協会の紛争に関連して—大西鉄之祐 体育の科学 第6巻第9号 P.348
5. オリンピックの理想と現実—東龍太郎 体育の科学 第6巻第1号 P.50
6. 英国におけるサッカーの発展—ブローケン・タイムの問題—竹腰重丸 体育の科学 第5巻第8号 P.328
7. アマチュアリズムの限界 岡部平太 体育の科学 昭和33年8月号
8. 毎日新聞 昭和34年12月8日
9. 現代身体訓練の地位—国際スポーツ会議より—大島謙吉 体育の科学 第4巻第2号 P.50
10. 主として次の2資料による。
①ソ連の体育、スポーツ 坂田二郎
体育の科学 第5巻第1号 (1955年日本体育学会特別講演)
②ソ連の体育とスポーツ 今村嘉雄、富山清著
大修館書店
11. 定義 (西と東) 体育とスポーツ 第3巻第1号 P.514
12. オリンピック憲章 第1部 根本原則 第1条
13. 中共体育界を視て 栗本義彦 体育の科学 第7巻第10号 P.407
14. クラウス・ウエーバー・テストの結果や日米青少年の運動能力の比較によって、生活が機械化し、スポーツがショー化しつつあるアメリカの青少年の体力、運動能力が日本に対しても劣ることがほぼ明らかとなった。ソ連との比較はないが、結果は充分推測することができよう。日米青少年の運動能力の比較 野口義之 第10回日本体育学会